



奈良県大和高田市立
高田商業高校

進学実績向上

全校体制の小論文指導で 進学にも就職にも強い 商業高校へと変貌

◎校訓は「礼儀・清純・誠実」。人づくりを教育の主軸に据え、挨拶、言葉遣い、礼儀作法の習得、資格取得に積極的に取り組む。部活動では、ソフトテニス、バスケットボール、バドミントン、弓道、簿記部やワープロ部、珠算電卓部などが全国大会に出場。

設立	1954(昭和29)年
形態	全日制/商業科/共学
生徒数	1学年約200人
2014年度入試合格実績(現役のみ)	国立大は、信州大、滋賀大、和歌山大、山口大、高知大に計5人が合格。私立大は、法政大、明治大、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大、近畿大などに延べ165人が合格。他に、短大20人、専門学校12人、就職35人。
住所	〒635-0011 奈良県大和高田市材木町8-3
電話	0745-22-2251
Web Site	http://web1.kcn.jp/ichisho/

変革のステップ

背景	実践	成果
◎全国の商業高校の動向を受け、市内唯一の市立高校として「進学も出来る商業高校」への転換の必要性を感じていた STEP 1	◎商業科対象の推薦入試に向けて小論文指導を開始。2009年には全校体制での指導に。模試の導入によるデータ活用も進行中 STEP 2	◎国公立大、関関同立も含め大学進学人数が急増。教師間の意識改革も進み、全校体制の指導を確立 STEP 3

商業科対象の推薦入試を
進学実績向上の切り札に

大和高田市立高田商業高校は、奈良県中西部に位置する大和高田市唯一の市立高校だ。繊維産業を基盤に商業都市として発展してきた歴史を背景に、「商都高田に商業高校を」という市民の声を受け、県下初の商業高校として開校した。検定資格取得のために商業科の教師が補習を行い、毎年多くの検定資格取得者を出しているのが、同校の商業科の特色だ。その同校が4年制大への進学指導に力を入れ始めたのは、十数年前のこと。当時の進路状況について、進路指導部長の山下善啓先生は次のように話す。

「本校の4年制大への進学者が毎年数人程度である一方で、全国には進学実績を着実に伸ばしている商業高校がありました。本校も、『進学も出来る商業高校』への転換の必要性を強く感じていました」

当時、同校の大学進学のルートは指定校推薦入試やスポーツ推薦入試が中心であり、国公立大や関関同立は高嶺の花だった。そこで注目したのが、私立大で導入が進んでいた商業科卒業生を対象とした推薦入試だ。推薦入試の受験希望者がいれば、学級担任が国語科に相談。国語科で担当を割り振り、1対1で早朝や放課後に小論文指導を行った。

同校には全国大会で活躍する部が多く、当初、

部の顧問から「練習時間が少なくなつて困っている」と言われることもあった。しかし、入試で関西大や近畿大などの合格者が続出すると、商業科推薦が大きな武器になるという認識が教師間に共有されていった。取り組みを主導してきた国語科の大島利隆先生はこう振り返る。

「初めは批判的だった先生が、次第に、部員に『大学合格に近づくから補習を受けてください』と声を掛けられたと聞いた時、胸が熱くなりました。生徒のためになると分かれば前向きに協力して下さるのが、本校の先生方



山下善啓 やました たしひろ
大和高田市立高田商業高校
教職歴29年。同校に赴任して29年目。進路指導部長。商業科。「卒業後、どんなことがあってもへこたれない生徒を育てる」



登利昌記 のぼり ますのり
大和高田市立高田商業高校
教職歴33年。同校に赴任して31年目。進路指導部。地歴・公民科。「継続は力なり」を肝に銘じて、生徒に接するよう心掛けている」



大島利隆 おおしま としたか
大和高田市立高田商業高校
教職歴13年。同校に赴任して13年目。進路指導部。進学主任。3学年担任。国語科。「ピンチこそチャンス。くじけずたゆまず、生徒と共に走る」



米田 碧 よねだ みどり
大和高田市立高田商業高校
教職歴9年。同校に赴任して5年目。進路指導部。3学年副担任。理科。「一期一会を大切に、自分の発した言葉に責任を持つ」

の良いところ。私自身も『絶対合格させる』と決意を新たにすることが出来ました」
県内に商業科推薦入試を利用する学校が少なかったこともあり、推薦入試合格者は順調に増えていった。数年後には国公立大合格者が出て、関関同立の合格者数は2桁に達した。実績が上がるにつれて大学進学希望者も増え、他教科の教師も小論文指導に加わっていった。

進路指導部の主導により 全校体制の指導がスタート

進学希望者の増加に伴い、新たな課題が浮上した。指導者不足である。10人程の教師で60〜70人の生徒の指導に当たる状況が続き、教師の負担が年々増えていくばかりであった。

転機が訪れたのは、山下先生が進路指導部長になった2009年だ。当時の校長から「どうせやるなら全員で取り組んではどうか」と提案されたのだ。山下先生は、教師全員に指導に加わるように呼び掛け、担当者の一覧表を作成して配布した。

当然反発はあった。「自分には出来ない」「小論文指導をしたことがない」という教師には、進路指導部が「大人が読んでおかしくない文章であれば、生徒を褒めてあげてください」と伝え、プレッシャーが掛からないように配慮した。また、4月から夏休みにかけて、外部講師を複

数回招き、小論文指導の研修会を開いた。「良い小論文とは何か」「構成力を高める工夫」といった技術面から、「集中力を高める」といった精神面まで、教師も指導法を学んだ。理科の米田碧先生も、4年前の赴任時から毎年3、4人の生徒を受け持っている。

「小論文指導は初めての経験だったので、先輩の先生方の指導や外部講師から得た知識を最大限に活用しました。1年目は結果が出るまで不安で仕方ありませんでしたが、生徒が『合格しました』と報告してくれた時は本当にうれしくて、自分の指導は間違っていなかったのだと確信できました」

良いと思っことは、何でも挑戦するという姿勢も大切にした。

「発表力を高めるために、生徒に『あいいうお作文』を書かせ、全校生徒の前で発表するという活動をしたこともありました。生徒も教師も楽しかったのですが、効果があまりないと分かり、翌年は行いませんでした。結果的に無駄ではありませんでしたが、トライ＆エラーの繰り返しの中で、指導力は高まってきたのだと思います」（大島先生）

「勉強とはどういうことか」を 徹底的に追求させる

国公立大の合格者増に向けた挑戦も始まっ

た。国公立大の小論文では、よりレベルの高い知識や記述力が必要となるため、指導にも一層厳しさが求められる。国公立大の小論文指導を担当する地歴・公民科の登利昌先生は次のように述べる。

「本校では商業系の検定試験合格を目指した指導に力を入れるため、国公立大の小論文入試に必要な知識が不足していることは明らかでした。一方、部活動の加入率は100%で、小論文学習に本格的に取り組めるのは、部活動を引退する3年生の7月以降です。入試までのわずか3、4か月の勝負になるので、生徒には最初から厳しい要求をしています」

小論文指導では、生徒に事前にテーマに関することを調べておくよう伝える。TPPであれば、正式名称はもちろん、交渉参加国の数とその変遷、各国の主要産業は何か、どの国との貿易が盛んなのかといったことまで、事前に調べておかなければならない。下調べが不十分なため、登利先生に質問され、困惑する生徒もいるという。

「プレッシャーを掛けすぎているかもしれないませんが、本気で勉強するとはどういうことかを生徒に体感させたいのです。単に大学に合格させるのではなく、大学進学後、あるいは卒業後も必要な知識、学習に対する姿勢を身に付けさせたいという思いで取り組んでいます」(登利先生)

外部模試を導入し 全国レベルを意識させる

より精度の高い進路指導を行うため、進路資料の活用にも着手した。12年度に初めてベネッセの「実力診断テスト」(*)を導入したのもその一環だ。

「本校には、進学指導を行うためのデータが不足していました。進路指導には職人芸的な面があります。ベテラン教師は経験に基づいて効果的な指導が出来ますが、それでは学校全体の指導力は向上しません。『この時期、この成績ならA大でも合格圏に入る』というようなアドバイスを、どの教師も自信を持って生徒や保護者に提示するために、客観的なデータが不可欠です」(山下先生)

模試の結果は、大学・学部ごとに進路情報をまとめた内部資料に反映される(図)。1枚の紙に、過去に大学を受験した生徒の評定平均値、所属部、取得した資格、更に学部・学科の定員や競争率、過去の小論文入試のテーマや面接の内容、指導した教師の所感などを一覧表にしたものだ。これを全教師で共有し、面談などで活用する。

同校の生徒は、他校に比べて、模試に対する意識が低いという。「スポーツ

推薦入試を受けるから、模試は必要ない」という生徒もいる。教師も同様で、以前は「小論文受験が中心だから模試は関係ない」という声もあった。しかし、その認識は間違いだ、山下先生は指摘する。

「大学に入れば、一般入試で合格した学生と推薦入試で合格した学生が一緒に授業を受けます。一般入試で合格した学生とは学力的に差があるという自覚を促すためにも、模試は欠かせません。また、模試は、社会で生きていく上で必要な知識・技能の定着度を測る指標でもあります。本校では上位層の生徒でも全国と比べればまだまだであり、『井の中

進学内部資料サンプル

年度	合格	氏名	クラブ	評定	英	国	理	地	生	体	音楽	美術	体育	資格
22	○		バドミントン	4.8										
23	○		バドミントン	4.1										
24	○		サッカー	4.1										
24	○		吹奏楽	3.5										

年度	学部	学科	定員	競争率	評定
21	理	理	100	100	2.75
22	理	理	120	120	3.00
23	理	理	84	84	3.00
24	理	理	78	78	3.00
25	理	理	95	95	3.00

年度	学部	学科	定員	競争率	評定
21	理	理	100	100	2.75
22	理	理	120	120	3.00
23	理	理	84	84	3.00
24	理	理	78	78	3.00
25	理	理	95	95	3.00

大学・学部ごとに、生徒情報、受験情報、入試問題、分析をまとめる。1人でも受験した大学・学部があれば追加し、教育資産として蓄積していく。
*学校資料サンプルを掲載

の蛙』とならないために、全国との力の差を意識させ、更なる努力を促すことも、模試の大切な役割だと捉えています」

模試の導入により、授業改善に対する教師の意識も高まっているという。

「模試の結果を見れば、自分たちの授業が生徒の学力向上に役に立っているかどうか一目瞭然です。先生方の切磋琢磨を促す上でも模試は良い効果を生んでいます」(大島先生)
外部模試の導入が生徒の視野を広げ、教師の授業改善への意欲も促しているのだ。

センター試験に向けた基礎学力の向上が今後の課題

小論文指導が始まる同校の改革は、多くの成果をもたらした。近畿大などの中堅大はもちろん、国公立大や関関同立の合格者が安定的に出るようになった。国公立大の合格者数が2桁に達する年もある。「大学進学も出来る商業高校」として地域に認知され、進学意欲の高い生徒が入学するようになった。そして、好調な就職実績も、進学を後押ししている。

「内定率100%という就職実績があつての進学であり、商業高校として、就職という軸はぶれてはいけません。大学の推薦入試よりも先に就職が決まります。就職希望者が熱心に、時には涙を流しながら面接の練習

をしている姿を見て、進学希望者も刺激を受け、『自分たちも頑張ろう』と意欲を高めるなど、進学希望者に良い影響を与えていると思います」(山下先生)

目指す進路は違っても、それぞれがやるべきことに真剣に取り組むことによって、生徒同士が刺激し高め合う好循環を生んでいるのだ。

次の課題は、基礎学力の向上だ。推薦入試・AO入試の合格者数は飽和状態になりつつある。外部模試を導入したのも、センター試験利用型の推薦入試、あるいは一般入試まで目を向けなければならぬ時期が近づきつつあるという切迫感も背景にあった。

「今後も、小論文と面接だけで勝負できる

とは限りません。学科試験でも勝負できるような基礎学力の向上を図っていきたくと考えています。まずはセンター試験の受験者数を増やして、合格者を少しでも出すことが出来れば、後に続く生徒たちの学習意欲も高まると期待しています」(大島先生)

もう一つは、もう一段上の意識改革だ。

「生徒も教師も進学に対する意識がまだ甘いと、私は感じています。読んだ本を生徒に紹介したり、新聞記事を解説したりして、日々、生徒の意識の向上に努めています。まだまだやれることはあるという意識を持って、保護者を含めた三位一体の意識改革に取り組んでいきたいと思えます」(登利先生)

情熱 若手教師が語る、指導変革へ

小論文にも生かせる授業へと発想を転換

進路指導部 米田 碧

本校に赴任し、「理科が嫌い」「必要ない」と思っている生徒があまりにも多いことに戸惑いました。前任は進学校で、いかに試験の得点を上げるかが指導の中心でした。本校には生物を受験科目にする生徒が少ないこともあり、単位数が少なく、実験をする時間の確保も難しい状況です。赴任当初は、学校文化の違いや指導上のギャップに悩む日々でした。しかし、小論文指導を受け持つからは、徐々に考えが変わっていきました。小論文を書くためには、書き方のスキルや時事的な知識に加えて、多角的なものの見方、考え方も必要です。「ものの見方・考え方」を養う科目として、生物を位置付けられると発想を転換したのです。

それからは、小論文にも生かせる授業を心掛けるようになりました。知識を教えるだけでなく、なぜそう思うのか、生徒に理由を語らせることによって、思考力や表現力を養うのです。私の授業で「分かりません」は禁句。教師が諦めてしまうと、生徒も諦めることを覚えます。ヒントを出してでも必ず自分で答えを見付け、達成感を持たせることを大切にしています。

看護学科の希望者が増える中で、理科の単位数が少ないことが今の悩みです。推薦入試で合格できても、生物に関する知識が不十分なまま、進学せざるを得ない生徒も少なくありません。限られた単位数の中で、いかに必要な知識を身に付けさせるかも、考えていきたいと思えます。